

日本建築学会北海道支部会長講演

テーマ：まちづくり市民事業と中心市街地の再生

講師：佐藤滋 先生（日本建築学会会長・早稲田大学教授）

本講演は、室蘭工業大学教育・研究1号館（A304教室）において、7月3日（土）15:30～17:30に開催された。司会は瀬戸口剛先生（北海道大学）、副司会は高井伸雄先生（北海道大学）が担当し、佐藤会長による講演の後、質疑応答が行われた。以下、講演、及び質疑応答の概要をまとめる。

講演の概要

近年、地球環境の変化やグローバル経済の破綻などに起因して、公共セクター、民間セクターによる事業推進の限界が顕在化してきている。こうした社会情勢の変化を受けて、中心市街地の再生においては、「新しい公共、第3の道」とも呼ばれる新しいまちづくりの手法が必要とされる。大学、建築学会は、この新しい公共、第3の道を示すことが必要とされるが、その手法の一つとして市民事業を挙げることができる。しかし、これまでの街づくりが合理的、効率的なインフラ整備に主眼を置いていたのに対して、市民事業は経済効率を必ずしも第一の目的には置いていない。つまり、まちづくりを通して市民に対する教育的効果を得ることや、市民が自らの手でまちづくりを行うことによって地域社会の活性化を促すことも市民事業の目的である。従って、経済的利益を追求する民間セクターが市民事業の主体的な担い手になることは難しい。そこで必要とされるのは、社会的企業である。社会的企業とは、必ずしも経済的利益のみならず、社会におけるさまざまな利益を得ることを主眼に置く企業であり、イタリアでは、例えば ANDRIA といった社会的企業が組織され、既に市民事業において成果を上げつつある。しかし、実は日本においても、社会的企業の基盤は既に整っているといえる。つまり、NPO や地域振興組合といった既存の組織を新たな公共の担い手として再定義することによって、社会的企業を組織することができるし、あるいは地域社会の有志によって LLP（有限責任事業組合）として社会的企業を組織した例も既に日本でも見受けられる。

では、市民事業を進める上で、大学や建築学会が果たすべき役割とはいかなるものか。山形県鶴岡市の街づくり事業や、新潟中越沖地震からの震災後の復興の例を鑑みれば、次のような役割を挙げることができる。すなわち市民の街づくりプロジェクトに対する創造性の喚起、社会問題の施策統合の象徴、社会システムの可視化、市民の創造を支える技術をもったコンサルタント会社や設計事務所等の専門家と市民との間を結び、これらによって新たな都市文化の創発、共発を行うといった役割である。これらの役割を果たし、これによって社会に貢献してゆくことが、これからの大学や建築学会に求められる重要な役割だといえる。

質疑応答の概要

質問

：現在、質問者が携わっている街では、まちづくりに関する既存の技術者集団が解体の危機にあり、新しいまちづくりの組織として再編する道を模索している。市民事業が今後の街づくりのキーワードとなりそうだが、市民事業に対して、この新しい技術者組織はどのようにかかわってゆけばよいのか。新しい技術者組織がうまく活躍する場を作るためにはどうしたらよいのか。

回答

：大学としては、まずは大学、市民、行政の間に長期的、かつ安定した関係性を築くことが必要である。そして、その中に技術者の組織をとりこんでゆく必要があると思われる。技術者は、賃金を得ることを目的として仕事をするため、市民事業の中に溶け込むことが難しい場合がある。そうした場合に大学、あるいは建築学会が仲介を行って、技術者集団と市民、あるいは行政とをなじませることが必要であり、そのための仕組みを大学や建築学会が作り上げることが必要である。

質問

：まちづくり市民事業に対して、既存の自治会等はどのような関わり方をし、どのような役割を果たせばよいのか。

回答

：自治会や町内会といった既存組織は、実はまちづくり事業を進める上で非常に大きな役割を果たすものである。つまり、市民事業を進める中で、自治会や町内会はNPO組織と一緒に活動を行っている。そして、最終的な事業の決定に際しては、自治会や町内会に対する市民の信用の大きさに基づいて、自治会や町内会が最終判断を下す場合もある。

質問

：質問者は、地元の市民とともにまちづくりに関わっている。本日の講演を聞き、市民の創造性の喚起を行うことが大学の大きな役割だと感じたが、その役割を果たすためには、教員のみならず、学生の働きも非常に重要になると思われる。市民事業を進める上で、教員は学生をどのように動かすべきか。

回答

：神戸における震災後の復興まちづくり事業では、問題の大きさから教員側は事業への参加の決定を見合わせていたが、学生が動き出してしまい、これに応える形で教員が動くこととなった。こうした姿を踏まえると、学生は、潜在的に自分たちの力を発揮すべき場所を待っているのではないかと。従って、学生を大学の中に置いておくのではなく、その地域へと送り出してしまえば、学生は自ら動くだろうし、少々無責任な感じもするが、その地域が学生を育ててくれ

ることも期待できる。逆に、その地域の市民たちも、学生の目を気にして、自分の行動を律するようになることも期待できるのではないだろうか。

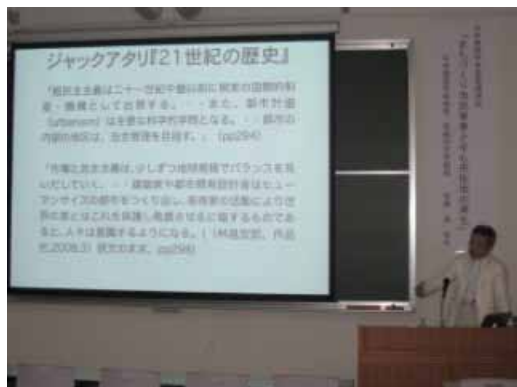


写真1



写真2



写真3



写真4